

小・中学校におけるいじめ予防を志向する 協同的な学びの展開

三津村正和（創価大学）・清水強志（創価大学）・根本淳子（愛媛大学）

キーワード：いじめ予防、いじめの構造、協同学習、即興劇

いじめは「関係性の病理」（森田，2010）といわれるが、児童生徒間の関係性は、不可視化、希薄化の度合いを増していることが指摘されている。すなわち、いじめは、教師の目にはより不可視的なものとなり、また児童生徒間の関係性が希薄化すればするほど、いじめの解決へ重要な鍵を握るとされる傍観者層の意識は、いじめの仲裁に対していっそう無関心なものとなる。

いじめが教師の目に（子どもの目にさえ）不可視的なものである理由の一つとして、いじめの態様の変容が挙げられる。いじめは、従来の「村八分型」（いわゆるシカトあるいは集団無視）と呼ばれる「排除のいじめ」から、「隷属型」または「囲い込み型」と呼ばれる「拘束のいじめ」へとその態様の変容し、いじめ加害集団が継続的にいじめ被害者を「仲間」（奴隷に他ならない）として従属させることで、いじめ被害者は、周囲からは、その仲間集団の一部であるかのように（肯定的にその仲間集団に属しているかのように）映るとされる（今津，2007）。例えば、『いじめ防止対策推進法』（2013年9月28日施行）制定の直接的な契機となった2006年福岡県筑前町三輪中学校いじめ自死事件の加害生徒は、被害生徒が「笑っていたからいじめになるとは思わなかった。」と述べている。本件におけるいじめ被害者は、加害集団からの度重なるいじめ行為がもたらした苦痛の末に、自死という選択を強いられたことに疑いはなく、いじめ被害者が「笑っていた」というのは、自分自身のプライドを保とうとする必至の抵抗であったからに他ならない。しかし、そのような被害者の微かな抵抗は、周囲の生徒によって、また教師によって受け止められることはなかった。本件のみならず、過去のいじめ自死の事例は、被害者の主観的な内面状態（「苦痛」）を把握することがどれほど困難であるかを十分に物語っている。

いじめは、加害者と被害者との間の二項対立の構図ではない。森田・清水（1986）は、いじめの四層構造（図1）を概念図として表した。そこでは、いじめは観衆者層や傍観者層を含んだ構造的（システマティック）な形態を取り、観衆者層からの「積極的是認」あるいは傍観者層からの「暗黙的支持（黙認）」をエネルギーとして、いじめは継続し、エスカレートするとされる（栗原，2013）。また、ある学級において四層構造が固定化した状態になると、最早、スタンフォード大学の「監獄実験」のように、それぞれの層に「見合った」あるいは「適切」と（子どもらの世界において）判断されるロールを各々の児童生徒が演じることとなる。

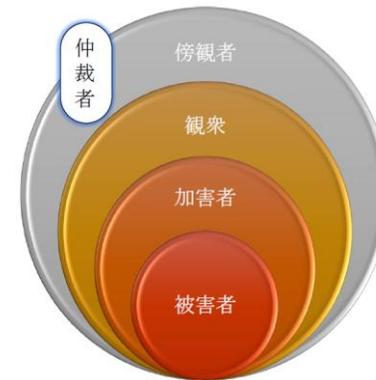


図1. いじめの四層構造図（森田・清水，1986）

では、そのような不可視化した固定化されたいじめに、教師はどう立ち向えば良いのか。いじめが構造的なまた制度化された様相を示している以上、それへの対時的なアプローチも構造的でかつその制度化された状態の克服を可能とするダイナミックなものであらねばならない。協同学習は、構造化された活動性の高い学びの仕掛けであり、「学び合い、教え合い」を通じた互恵的・相互成長の関係性の構築および「助け合い、支え合い」による自他共栄のこころの涵養を志向する。さらには、協同学習は、人間関係を可視化させる、すなわち四層構造を概念論ではなく現象論として教室に湧現させ、さらには固定化された人間関係を流動的なものに変容させるパワーを内包している。「教師は、『授業』で勝負する」という言葉がある通り、「いじめは、『授業』で予防する」ものであることを訴えたい。

要約すると、本研究チームは、上述のような関係性の不可視化また固定化への対時的なアプローチとして、協同的な学び（協同学習、プロジェクト・アドベンチャー、即興劇の複合体）を位置づけており、本ワークショップでは、学期を通じて協同学習を構造的そして効果的に展開していく展開例、プロジェクト・アドベンチャーの活用例、また四層構造の各層の当事者視点を考察するための即興的な演劇活動の疑似体験を促しながら、参加者の皆さまとともにいじめの本質について考えるワークショップとしたい。

参考文献：

- 森田洋司．（2010）．いじめとは何か―教室の問題、社会の問題，中央公論新社
- 今津孝次郎．（2007）．いじめ問題の発生・展開と今後の課題―25年を総括する，黎明書房
- 森田洋司・清永賢二．（1986）．いじめ―教室の病い，金子書房
- 栗原慎二．（2013）．いじめ防止6時間プログラム―いじめ加害者を出さない指導，ほんの森出版